

V. 今後の課題

1. 市民による情報収集

本生態系レッドデータブックは、これまでに得られた情報から重要な生態系を抽出・評価したが、まだまだ生物的な情報は不足している。今後は、市民参加による本生態系レッドデータブックの改訂などを視野に入れて、情報の収集を図っていかなければならない。たとえば、広く市民に情報提供を呼びかけ、生物情報の密度・精度を上げていくことが必要である。

なお、生態系を評価する場合、どのような種がどのような環境に生息していたのかという位置情報がなければ困難である。そのため、情報収集についてはできるだけ詳しい位置図と、その場所の環境（たとえば植生タイプなど）の位置情報が不可欠である。

2. 生態系評価に向けた生物調査の充実

市民による情報収集を行う一方、学術的な生物調査の充実も必要である。しかし、市内全域をくまなく調査することは非常に困難であるため、環境の指標性の高い種のみを指標種として調査し、基礎データを蓄積していくことが重要である。たとえば、昆虫類の場合、目視による調査が可能で位置情報を記録することの容易なチョウ類・トンボ類など、その他森林環境を指標する種として、移動力が小さく確認位置周辺の環境との相関が強いと考えられる地表徘徊性の昆虫類などを対象とした調査が必要である。

さらに、食物連鎖の上位にある猛禽類などの鳥類がどのような環境をどのように利用しているのか調べることも重要である。なお、対象とする種や調査方法については、専門家の意見を十分に取り入れて検討する必要がある。

3. 小学校区における生態系レッドデータブックの具体的な活用

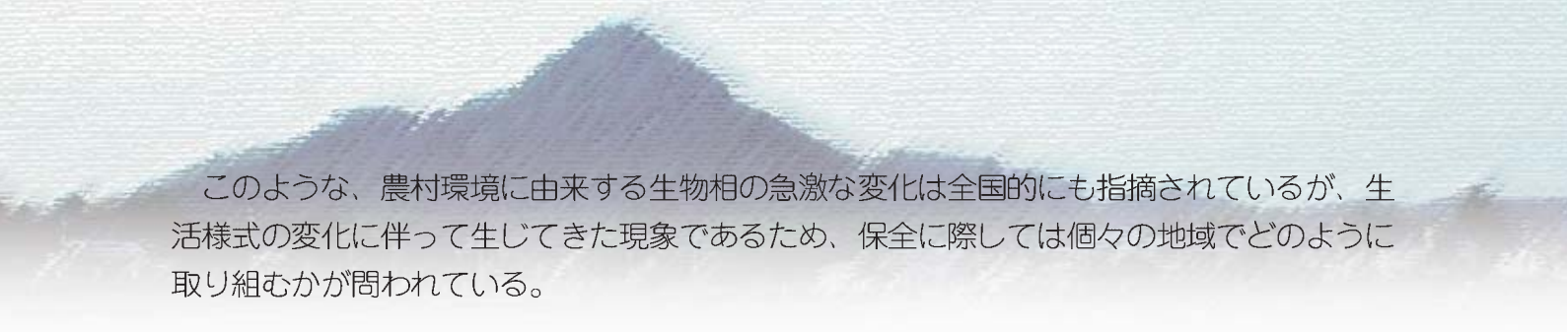
本生態系レッドデータブックは、環境教育的な目的も踏まえ、大生態系を小学校区としてとらえて作成した。しかしながら、小学校などにおける具体的な活用方法は明らかには決まっていない。たとえば、本生態系レッドデータブックにより、小学校児童や教諭などを対象とした環境教育としての副読本の作成などが考えられる。

4. 生態系保全のための管理の必要性

(1) 人の生産活動によって確保されているもの

三田市内に広く成立しているのは、水田やため池、里山など定期的に行う農作業により維持される環境が、さして広くない単位でモザイク状に分布している。つまり、三田市を代表する生きものの多くは、人が常に手を加えることで維持される環境に生育・生息していると言える。

一方、農村環境に生育・生息の場としていた生きものの中には、キキョウ、メダカ、オオタカなど、高度成長期以降の生活の変化とともに衰退・激減しているものも少なくない。これは、河川改修やほ場整備などに伴う環境の単純化、経済価値の低下に伴う薪炭林の放棄、宅地化などによって、生育・生息に適した環境が変化し減少してきたことによる。



このような、農村環境に由来する生物相の急激な変化は全国的にも指摘されているが、生活様式の変化に伴って生じてきた現象であるため、保全に際しては個々の地域でどのように取り組むかが問われている。

(2) 自然状態で持続する仕組みを失った湿原

湿原は、本来ならば人為の影響を受けずに成立している。それは、個々の湿原では徐々に遷移が進み、消失してしまうものの別の場所に新たな湿原が生じ、地域全体としてみると、湿原の生きものの多様性が保全されるという仕組みが成り立っていることによる。

しかし、湿原が生じやすい南西部の丘陵地が大規模に開発されたことにより、新たに湿原が生じる機会が激減した。そのため、現存する湿原の重要性は非常に高い。本来ならば人為の影響を受けずに成立する湿原ではあるが、湿原として維持するための植生管理が必要となる。

(3) 外来種対策～特にため池生態系の保全～

三田市でもブラックバス、ブルーギルなどの魚食性の外来魚が増えてきている。これまでの調査では、貴重な魚類などが生息しているため池ではそれらの外来種の移入がない場所が多い。また、アメリカザリガニが多数生息しているため池では、浮葉植物群落がみられず、アメリカザリガニによる食害の可能性がうかがわれる。

外来種による生態系への悪影響は全国的な課題となっており、三田市の重要な生態系を残していくためにも、外来種調査による実態の把握やその対策を検討していく必要があると思われる。